

私はチリの弾圧から亡命しました。
以来 今日までの、この歳月。
軍に受けたあらゆる暴力、殺された家族。
私は誰にも告げることが出来なかった。
映画が私のストーリーを代弁しました。
今晚、私の傷はなぐさめられ、
心は解放されました。

スコットランド試写会より

悲しみを乗り越えた人間ってこんなに美しくて、
そんな人間がいる地球ってすごいところなんだと。
すべての仲間たちと見たいと思った。

HOU 音楽家

涙のあと、心の底から
力強く立ち昇るモノがあります。

あっぱれ宮原音楽家

見終わったとき、
愛おしさがこみあげて、
たまたまなく
家族に会いたくなった。
家族の顔を見て、
また泣いてしまった。

長野県試写会より

もう15回以上観ましたが、
毎回、心に残る場面や
言葉が違っています。
回数を重ねるごとに、
この映画の深さが分かります。

江口 島屋 音楽家

『カンター・ティモール』

という映画をご存知
でしょうか？
これが何となく
考えさせられる
映画でして、
涙が、後から後から
溢れてくるんです。
自分の立ち居地を
今一度確認する
ことのできる
すごい映画だと思います。

中村文昭 旅日記り

黒潮でつながる環太平洋の映画。
ティモールの山や森、文化の中に、たくさんの日本を見つけることができる。磯野 孝

ティモールの歴史も福島の新潟も、根本の原因は同じ。
それは昔の話じゃなくて、「今」起こっていること。橋本卓道 cafeTOSCA

なんと、素晴らしい映画が
またこの世に誕生したことか。

てんつくまん 映画監督 メルマガより

世界中の人たちに、見て欲しい！
この映画を。

悲しみに、うちひしがれているひとたちに。
苦しみを、訴えられずにいるひとたちに。
憎しみのくびきから、逃れられずにいるひとたちに。
そして、もちろん、喜びに溢れているひとにも。
この映画を見て欲しい！

世界中の人たちに、聞いて欲しい！
この歌声を。
この物語を。

世界中の人たちに、知って欲しい！
南の島の歴史と今を。
そしてそれらは、今という時を生きている
すべての“私たち”と、無関係ではないってことを。
渡辺一枝 作家

Canta! Timor

☎070-5448-4584

✉mahaloaina@gmail.com

公式サイト www.canta-timor.com

twitter @CANTA_TIMOR

f www.facebook.com/canta.timor



映画は常に
歌が流れていた。
美しい東ティモールの
空と緑と、
広がる田んぼと、
太陽みたいな子どもたちと、
おだやかな
ほんとうにおだやかな
微笑みをもったおとなたちと。
その歌が、リズムが、
声が、ひびきが、とけ合っ
てからだのなかで
ずうっとはじけていた。

なやカフエ



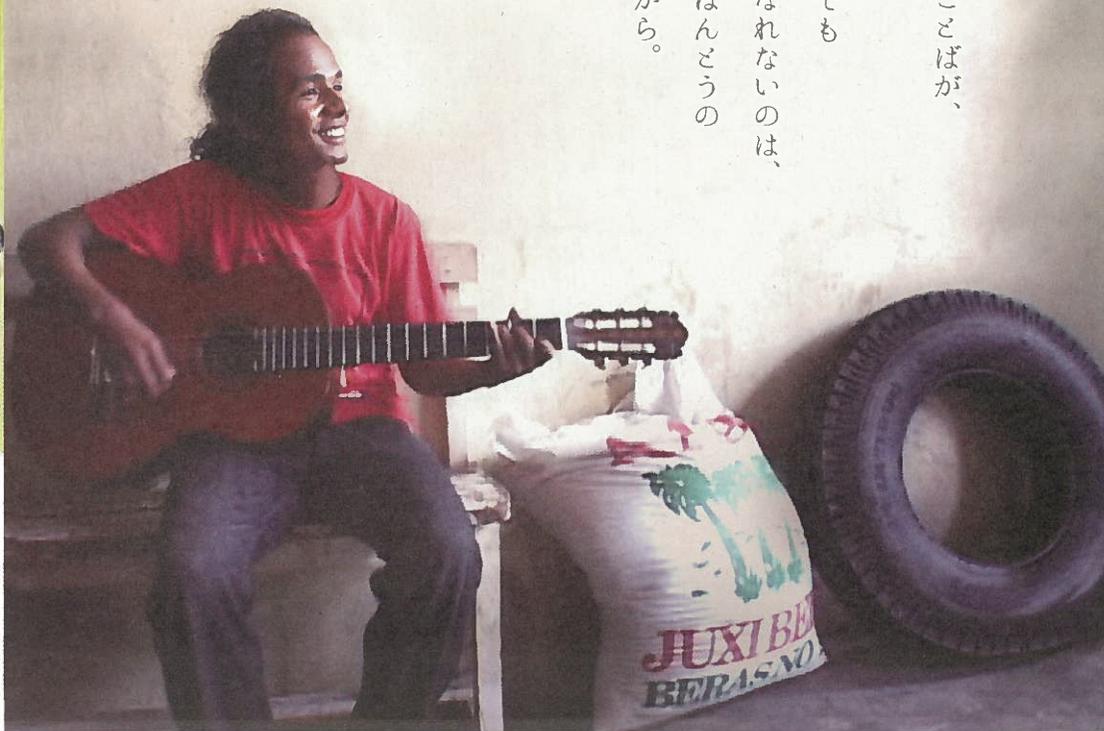
Canta! Timor

南国ティモール ひとつの歌に導かれた運命の旅

カンタ!ティモール

うたえ!ティモール

彼らのことばが、
うたが、
いつまでも
心をはなれないのは、
それがほんどうの
物語だから。



『カンタ!ティモール』 大阪上映会

ナビゲーター
女優 齊藤とも子さん

日時 平成27年 3月28日 (2回上映します)
午前10:00~12:30
午後 2:00~ 4:30
参加費 1000円 当日受付へお支払い下さい
申込先 白光真宏会 大阪支部
電話 06-6444-8620
Email byakko.osaka.info@gmail.com

Canta! Timor



うたえ！ティモール

監督：広田 奈津子
助監督/音楽監修：小向 サダム

監修：中川 敬 ソウル・フラワー・ユニオン
南風島 渉 フォトジャーナリスト「いつかロザエの森で」
東ティモール・ゼロからの出発(たびだち)著

スタイル：小幡文人 / 直井保彦

ドキュメンタリー/カラー/DV/110分/4:3/ステレオ
2012年東ティモール・日本/日・英・テトゥン語
字幕・日・英・仏・テトゥン語/自主制作・初監督作品

公式サイト www.canta-timor.com

舞台は南海に浮かぶ神々の島、ティモール。

ひとつの歌から始まった運命の旅が、音楽あふれるドキュメンタリー映画となった。

この島を襲った悲劇と、それを生き抜いた奇跡の人びと。その姿が、世界に希望の光を投げかける。

当時23歳だった日本人女性監督は、人びととの暮らしの中で現地語を学び、彼らの歌に隠された本当の意味に触れてゆく。そして出会う、光をたたえるまなざし。詩のようにつむがれる言葉の数々。それは観る者の胸をそっと貫き、決して消えない余韻となる。

日本が深く関わりながら、ほとんど報道されなかった東ティモールの闘いを取りあげた、国内初の長編。

自主映画ながらも感動は国境を越え、5カ国100カ所以上の試写会で会場が心を震わせた、愛すべきエチュード。

3.11以降の日本人の生き方のヒントが、この映画にはつまっている。

STORY 東ティモールで耳にした、ある青年の歌。日本帰国後もメロディが耳に残って離れない。

監督たちは青年を探すため島へ戻る。そして一つの旅が始まった――

「ねえ仲間たち ねえ大人たち 僕らのあやまちを 大地は知っているよ」

歌はこう始まっていた。

直接的な言葉を歌えば命に危険が及ぶ、インドネシア軍事統制下にひっそりと歌われた歌だった。

青年に連れられて、監督たちは島の奥へと入っていく。

そこに広がるのは、精霊たちと共にある暮らし。青い海、たわわに実るマンゴー、はじけるような笑顔の人々。

常夏のおおきな太陽に照らされ、深い影を落とすのは、人々の命を奪った軍事侵略。

報道にのらない地下資源ビジネス、日本の驚くべき行動。

3人に1人が命を落としながら、彼らが守り抜いたもの――

「悲しい。いつまでも悲しみは消えない。でもそれは怒りじゃない。怒りじゃないんだ。」

「人は空の星々と同じ 消えては 空を巡り また必ず 君に会える」

弾丸が飛び交う中、人々は命をわけるように助け合い、そして笑い、歌った。

大地に生かされ、輪になって踊る、遠く懐かしい風景。

いつのまにか、ティモールの旅はそっと監督たちに問いかける。

愛すべきふるさと、日本の島々の姿を――

人類はひとつの兄弟なのさ
父もひとり、母もひとり
大地の子ども
憎んじやだめさ、叩いちやだめ
戦争は過ちだ、大地が怒るよ。

